

栄西の思想研究序説

木下杏南（日本倫理思想史ゼミナール）

序章

明庵栄西（1141～1215）は、鎌倉時代に活躍した臨済宗の禅僧である。中世は仏教が強い権力を有した時代であったが、特に彼が生きていた鎌倉時代は、武士階級の台頭に伴い、武士の心構え・精神性と相性の親和性の高い禅宗が盛んになりつつある時代であった。以上の状況であった日本禅宗（臨済宗）の初祖と言われる栄西であるが、栄西の禅は「兼修禅」と見なされており、不順で不徹底な面があることや、幕府との癒着等、かつては消極的な評価をされることも少なくない。このような現代からの栄西に対する批判や指摘が妥当であるのか、栄西の思想を様々な視点から追究し、考察することが本研究の目的である。

第1章 栄西の実像

まずは、栄西の生涯について時代背景と照らし合わせまとめた。栄西は第1回入宋の時点では「禅僧」ではなく「密教僧」としての活動であったが、第2回入宋時に虚庵懐敏（生没年不詳）の元に参禅後、「禅僧」として活動するようになった。生涯を通して見ても、栄西は密禅併修の「兼修禅」の宗風であることが分かる。

鎌倉時代は公家政権・武家政権ともに仏教を根拠として執政していた時代であり、栄西も政権と強く関わっていた。しかし、このような権力との癒着は仏教界の墮落にも繋がった。特に当時の仏教界で強い権力を有していた叡山の墮落は著しく、栄西を始めとする修行者は叡山を下り、独自の仏教を展開していった。これがいわゆる鎌倉新仏教誕生の過程である。

鎌倉新仏教の台頭後も叡山の権力は強く、鎌倉新仏教の布教活動に圧力をかけられることも多くあった。禅宗も同様であり、栄西は京での弘法活動を阻まれた。『八宗綱要』や『元亨釈書』の叙述からも、禅宗が民衆に浸透していなかったこと、禅宗を受け入れる素地が日本には未だ無かったことが分かる。このような状況であった鎌倉時代初期では、栄西が「純粹禅」の立場で活動するのは困難であっただろう。このことから、栄西が「兼修禅」の宗風を取っていたのは、当時の日本の仏教界に適応するためだと理解できる。

第2章 栄西の思想

第2章では、栄西の著作から、彼自身の仏教思想・基盤的思想について考察した。まず、栄西の著作は第2回入宋前後で性格が異なる。第2回入宋以前は「密教僧」として、以後は「禅僧」としての著述が多い。しかし、一貫して密教は顕教に勝るという思想を持っていたということに注目したい。

尊賀との密教論争が記された『重修教主決』『改偏教主決』からは、栄西の密教に関する理解の深さが分かる。また、栄西は理想主義的・相対的な志向があるとも考察できる。第2回入宋以後の著作からは、仏教と身体を関連させる傾向が見て取れる。日常の行為と密接に関わることで、在世での成仏を保証するなど、「日本仏教」の特質に当てはまっている。

栄西は、本場インドでの純粋な仏教への憧憬があるとともに、同時に諸宗派を超えた総合仏教としての日本仏教興隆への志も強かった。彼にとって密教・顕教や、遁世僧・官僧というような枠組みはそこまで重要ではなかった。それよりも、本場インドを理想とした日本での仏法興隆を達成するために、どのように弘法をすれば良いのかについて葛藤していた。その結果、栄西の独自の宗風・仏教観が生まれた。

第3章 栄西と周縁者との関わり

第3章では、栄西と周縁者との関係性を検証し、よりミクロな視点で、鎌倉仏教界と栄西について考察した。栄西と同時代に活躍した僧には尊賀（生没年不詳）・覚阿（1143～没年未詳）・能忍（生没年不詳）を挙げた。彼らに対し栄西は共通して批判的な叙述が多く、並々ならぬライバル意識を持っていたことが分かる。しかし、栄西の批判というのは必ずしも消極的なものではなく、むしろ互いに影響を与えながら禅を広めるための布教活動の一環としてあった。

では栄西と後世の僧たちとの関係性はどうかというと、栄西門下（建仁寺僧団）については栄西の兼修禅の宗風をそのまま受け継いでいる。栄西同様、密教関連の知識もあったとみられる。

曹洞宗初祖である道元は栄西門下に参禅しており、栄西門下から間接的に栄西の思想を学んだ人物である。しかし、道元は純粹禅の立場をとっているのが特徴である。栄西と道元は、臨済宗初祖に対し曹洞宗初祖、兼修禅に対し純粹禅というように二項対立の枠組みで捉えられている。しかし、実際は道元の曹洞宗も栄西の思想・宗風を踏まえた上でのものであるから、完全な対立関係にある宗派だとは言い難い。

以上の系譜、相承関係を踏まえると、栄西の思想は変容しながらも受け継がれ、現代の日本禅宗の根底的思想として残っているとも評価できる。

第4章 栄西著『未来記』の思想史的考察

第4章では、栄西の著述のうちの『未来記』に記された予言を基軸として、栄西の特徴的な思想を推察した。『未来記』にはまず、仏海禅師の予言が2つ記されている。1つ目は、「自分（仏海禅師）の没後20年後に禅の教えが広まる」という主旨であり、はたして栄西が中国に渡り、日本に伝え帰ったことが記されている。2つ目は自らの死期についての予言であり、それが的中したと示されている。その上で栄西の予言があり、栄西の没後50年後に禅宗が盛んになるだろうという予言が記されている。上記の栄西の予言について、栄西没後の著作によると、その予言は的中した結果となっている。

未来記は中世に共有されていた著作方法であり、仏教各宗派の祖師達も自らの宗派の正統性を主張するために利用していた。栄西も同様である。日本での禅宗布教活動に頓挫した栄西は、禅宗の興隆を後世に託し、予言を残した。栄西の『未来記』は、自らの禅の正統性を主張するとともに、後世においても、禅宗が正統に受け継がれてきたことを示すバトンとしての役割を、予言という形で果たした。それは、後世の禅僧に対しての遺戒としても機能していたのである。

終章

第1章から第4章まで、多角的な視点から栄西の思想について考察してきた。

序章で述べた通り、現代からの栄西の評価は必ずしも高くはない。栄西の功績に対しては不純・不徹底な面があるという旧来かつての理解がある。しかし、この栄西の不純・不徹底な面は、鎌倉時代や鎌倉時代以後の仏教が隆盛するために必要な姿勢であった。本場インドの正統の仏教に憧れ、入宋を経て禅を学び、日本での弘法に苦戦しながらも、生涯をかけて失われなかった仏法興隆の志と未来志向にこそ、栄西の特出すべき思想があるというのが、本研究の結論である。